



# 男は 痛い !

國友万裕

第7回

電車男

## 1. まだらマッチョ

大学の2年の時のことだ。僕は英会話教室に通っていた。ある夏の日、授業の中休みに、女性の先生（当時30歳くらい）から、突然、こう言われた。

「あなた、背中に毛が生えているわね。私、初めて見たわ。日本の男性としては珍しいわね（笑）」

他の生徒たちもいる前での発言である。夏になって、それまでよりも薄着になったので、シャツの隙間から僕の背中の毛が見えたのだろう。それを面白がったのコメントなのだ。

確かに、この女の先生は「毛深いのが悪い」とは言っていない。女子に毛深いと言っては失礼だけど、男子だからちょっとくらい弄ってもいいかと思って言ったことなのだろう。しかし僕は、「この先生は授業中に、俺の体毛なんかを観察していたのか」という気持ちになって極めて不愉快だった。女子が男の先生から「いいお尻しているねー」と言われて、不愉快になるのと同じことだ。

今、考えれば、明らかにセクハラである。僕も教壇に立っている身で、僕は面白い系の先生なので、学生の前で冗談はしょっちゅう言っているが、しかし、男女を問わず、容貌のことだけは、冗談であっても、口にしないと決めている。容貌のことは、最も相手を傷つける部分で、こっちは誉めたつもりであっても、相手は傷ついたりするからである。

毛深いということは、子供の頃からの僕の悩みの一つだった。中学くらいから少し胸毛が生え始めて、それがどうにも気になって、薬局に脱色剤や脱毛剤を買いに行ったことも

ある。もちろん、薬局のおじさんには「お姉さんから頼まれたんだ」と嘘をついた。

試してみたのだが、あまり効果はなかった。脱色剤だと毛の色が薄くなるだけなので、毛そのものがなくなるわけではない。また脱毛剤は、あまりにも綺麗に毛がなくなってしまうため、逆に不自然な印象を与える。剃刀で剃ると、ますます毛が太くなる。また脱毛剤にしる、剃刀にしる、すぐに新しい毛が生えてくるのである。

その後、脱毛テープや脱毛ジェリーみたいなものが市販されるようになって、これだと根元から毛を抜くせいか、ある程度は毛のない状態が長続きする。しかし、抜く時の痛みは大変なもので、肌が赤くなって因幡の白ウサギのような状態となる。そのことは、『ハート・オブ・ウーマン』（2000）や『40歳の童貞男』（2005）などハリウッド映画でも描かれている。映画で描かれるところを見ると、脱毛を試したことがある男は、僕以外にもたくさんいるということなのだろうけど、やはり男の脱毛はコメディになっちゃうねー。それほど真面目な問題としては描いてもらえない。

しかし、笑ごとにされては困る。日本は毛深い男は嫌いだという女が多いからだ。欧米に比べると、毛深い男性は少ないから、見慣れていないというのが最大の原因なのだろう。もっとも、「毛深いのが気持ち悪い」なんていうのは、高校生くらいの女の子で、大人の女性は、好きになった男が毛深ければ、毛深い男が好きになる。事実、毛深いことが原因で女性と上手くいかなかったという話は聞いたこともない。だから気にすることはないだろう。しかし……。

男性はむしろ、毛深いのが羨ましいという

人もいる。人間はない物ねだりで、毛の薄い男性からすれば、胸毛は男っぽくてかっこいい。長嶋だって、加山雄三だって。それと僕の知り合いの細マッチョの若い男性によると、「毛深いのは男性ホルモンが多いということで、筋肉もつきやすいということなんですよ」とのこと。これは事実なのだろう。僕は胸や脚が毛深いので、胸囲は普通の男性よりも大きいし、マッサージの人から「いい脚ですねー」と言われる。一方で腕にはなぜか、筋肉がつかなくて、血管も細いので注射がしづらい。僕は、腕は毛深くない。

僕は全身が毛深いわけではなく、部分的に毛深いのだ。背中毛にしても、背中全面に毛が生えているわけではない。背中の上の方に鰓のように生えているだけのことで、下の方は生えていない。確か坂本竜馬がこういう生え方だったはず。

僕はあごひげが濃いので、若い頃、将来絶対に禿げると思っていた。あごひげが濃いということは顔の男性ホルモンが多いということなのだから、当然、禿げる可能性も高いと聞いたことがあったからだ。しかし、50近くになった今でも、禿げる気配はまったくない。美容院の美容師さんからも、「国友さんは絶対に禿げないタイプですよ」というお墨付きをいただいている。長年、美容師をやっていると、禿げるタイプの人と禿げない人の区別はつくのだそうである。

僕の男性ホルモンはまだらなのである。ホルモンの多いところとそうでないところが分かれているわけだから。そういえば、前に親しくしている男性から、「国友さんって、所々マッチョですよ」と言われたことがあった。僕は性格も、マッチョなところとマッチョで

ないところがあるらしい。

そう思ってしまえば、自分が好きになる。俺は、所々マッチョ……これは理想的なんじゃないか(笑)。マッチョな男とフェミニンな男の両方の善いところをもっていると解釈することも可能だ。そう、『風と共に去りぬ』のレット・バトラー(マッチョ)とアシュレー(フェミ男)の両方の側面を俺はもっているんだ一、とポジティブに考えようじゃないか。所々マッチョ、まだらにマッチョ、僕は「まだらマッチョ」と自分を命名したいと思う。

## 2. 久しぶりの脱毛

体毛については、20 過ぎるくらいからだんだんと気にならなくなった。21 の頃からプールに通い始めて、今でも通っている。もうかれこれ 30 年近いプール歴で、自分の裸をさらすことには普通の男性よりもはるかに慣れてしまっている。プールに行くと、毛深い男性も意外に多いし、女性たちの方もそのことを気持ち悪がっているというふうではない。若い女性の「気持ち悪い」は間投詞みたいなもので、それほど深い意味はないのかもしれないのだ。

そんなわけで、まったく毛深いことを気にしないで長い間、生きていた。ところが先日、僕のところにマッサージの友人が来た時のことだ。ムダ毛の話になった。彼は毛深いわけではないのだが、マッサージを自分の脚で試してみるのに、すね毛が邪魔になって、剃ってしまったというのである。「一回、胸毛とか、全部剃ったらどうですか」と彼から言われた。「でも、俺はプールに行っているからね。いきなり胸毛がなくなったりしたら、変に思う

人もいるだろうし(笑)」「意外にそんなの皆、覚えていないですよ」というやりとりとなった。僕は、この夏、彼と海に行く予定なので、ヘラクレスの彼と並んで海水パンツ姿になっても、見劣りしないような身体になるため、シェイプアップをしようと思っている。毛がない方が、筋肉は見えるし、写真で撮っておけば、身体の変化もわかりやすいだろう。やってみようか。

それでネットで探してみたら、この頃は男性用の除毛クリームもたくさん出ていて、意外に安い。この頃は、三浦和義や木村拓也が男のエステのコマーシャルをしたりもしているので、男が脱毛したりすることも、昔ほど奇異なことではないのだろう。50 近くになって、今さら男のエステもないか、いや、50 近くになったからこそ、エステでもして、自分を綺麗に保つ努力をしなきゃいけないのかもしれないのだ。

数日後、ふたたび、マッサージの友人が家にやってきた。「買ったんだよ」とクリームを彼に見せた。「さっそくやってみましょうよ」と彼も乗り気。僕の胸からお腹にかけての毛深いところにたっぷりとクリームをスプレーし、5 分から 10 分時間をおく。その後、ティッシュで拭きとるというやり方だ。ものの見事に僕の毛はなくなった(笑)。

その 2 日後、久しぶりにプールに行った。しばらく怪我で休んでいたのも、2 カ月ぶりくらいで顔見知りのおじさんにも会った。「怪我しちゃって、大変だったんですよ」と話しながら、僕は半分身体を傾けて、胸が見えないように神経質になっていた。おそらく、俺の胸なんて覚えていないだろうけど、やはり、なんとなく気になった。「あの人、脱毛したん

じゃない」と噂したりするのは、一般には女性たちだし、男の人だったら、気づきもしなかったりするのだけでも。

そんなわけで、せっかく久々のプールだったのに、胸が気になって、のびのびとリラックスすることができなかった。実は、これを機に、定期的に脱毛して、毛のない状態を保った状態でプール通いしようかと思っていたのだが、そこまでするのはしんどい。後は生えるに任せて、海水浴とか写真を撮る時だけ、脱毛すればいいかと思った。

### 3. 格闘家になった！？

脱毛した後、何枚か上半身裸の写真を撮った。俳優さんやモデルさんとはわけが違うので、あまりカッコ良くない。50のおじさんだから仕方がないかと、とった数枚の写真を見ながら思ったのだが、1枚だけマッチョポーズで撮った写真がすごくよくとれていて、撮ってくれたマッサージの友人からも、「格闘家みたいでいいですね。僕のメールにも送ってくださいよ」と言われた。

今は便利なものができたもので、写真も添付すればすぐに彼のスマートフォンに送れる。さっそく送った。「他のお客さんに見せていいよ」と言った。しかしメールを送りながら、変な心配がわいてきた。間違っ、女性の友達に添付したりしてしまったりという不安だ。いや、男の友達であっても、裸の写真なんかを間違っ、送りつけたりしたら、変な気持ちになるだろう。メールは送りやすいし、間違っ、送ってしまうケースが時々あるので、気が小さくて心配性の僕は、起きてもない状況を想定して心配をしてしまうのだ。

僕は、知らない女性に裸の写真を見られても抵抗ない。プールで会っている女性は普段が知らない人なので、いくら裸を見られても平気だ。しかし、普段仕事などで一緒の女性に見られるのはなあー。恥ずかしいというのもあるけど、「裸の写真を見せられた。セクハラだ」と言いがかりをつける女がいるんじゃないかなあーなんて、あらぬ心配をしてしまう。ジェンダーにとらわれるとこうなっちゃうんだねー。

### 4. 黒子をとりたい！

ムダ毛のほかに、僕がもう一つ気になっているのは、顔の黒子だ。僕の顔には顎と口元に二カ所、米粒大の黒子がある。何度かとうとうと考えた。何よりも困るのは、僕はひげが濃いので、剃刀を当てる時に、下手に黒子に当たると血が止まらなくなることである。黒子は血の塊なので、バンドエイドをしても長い時間とまらなかつたりする場合もある。

それにやはり顔のイメージを少し変えてみたいという気持ちもあった。黒子は皮膚科の病院でもとってくれると聞いていたし、黒子くらいだったら、整形のうちには入らないかと思っていたのだ。整形したと思われるのは、なんとなく抵抗があった。「あの人、芸能人でもないのに、男のくせに整形なんてして」と陰口言われそうで怖かったのだ。黒子くらいはプチ整形と言ってしまえば、すむだろう。この頃は、男の子でも歯を矯正している子はいし、それと同じと考えてしまえばいい。しかし、千昌夫は黒子を取った途端に借金まみれになったと聞いたしなあ。顔のイメージが変わるのも怖いし……とあれこれ悩んで、

結局、とらずじまいだった。

3年ほど前、僕が通っていた鍼灸の先生が、「お灸でも黒子はとれるからやってみますか」と言ってくれたことがある。これは絶好のチャンスかもしれない。俺はこの先生を信頼しているし、お灸だったら東洋医学だから、整形に比べればまだ抵抗はなかった。

しかし、その後、先生から、「申し訳ないんだけど、国友さんの黒子だどとった後、クレーターみたいになってしまう可能性があるんです。だからとらないほうがいいのかと思って」と言われた。それでこの計画も没になった。

なんかかんかで、僕の顔には黒子がこびりついたままだ。この先とる日が来るのだろうか。これから不幸な出来事が相次いで、「運勢が悪くなったなあ」と感じた時は、黒子をとろうと思っている。黒子のせいで運が悪くなるという可能性もあるからだ（笑）。

## 5. ジェンダーは難しい。

とりとめもなく、品のない話を書いてしまった（笑）。でも、僕がここまで書いてきたことを読んで、読者の方はどう感じられるだろうか？

男性問題として考えるならば、僕は、まだ除毛したり、黒子をとったりすることに躊躇を感じている。おそらく女性だったら男ほどには躊躇を感じない。これはひとつの男性に対する抑圧だ。男は、顔とか容貌を気にするべきではないという価値観を僕は刷り込まれているのだ。しかし、この問題は、徐々に解決してきているようにも思える。おそらく、今の若い男の子は除毛や黒子除去くらいは、それほど偏見はもっていない。格闘家のように

な僕の上半身裸の写真を細マッチョのお兄さんに見せたのだが、「夏に向けて、いい感じになったじゃないですか」と僕が除毛したことも、何とも思っていない様子で、笑顔で答えてくれた。おそらく、僕の価値観の方が古いのだ。

その一方で、元々無精者の僕は、綺麗な男が規範になってしまうのも、それはそれでしんどい。男は女性に比べると、ある程度、汚い格好をしたり、お行儀の悪いことをしたり、部屋を散らかしたりということも許される。これは男の特権である。この特権は手放したくないけど、ジェンダーセンサティブ男の僕は特権を行使することにも躊躇してしまう。

ジェンダーに鈍感な人。あるいは、ジェンダー規範と自分の性格や性癖がほぼ一致している人は幸せだ。完全一致とまでは行かなくても、社会が普通と見做してくれる程度に一致している人は、生きていきやすいだろう。しかし、僕は大きく規範に外れた男であるがゆえにジェンダーに批判的になり、女性化するのも抵抗があるけど、男の特権を行使するのも躊躇する。両方に引き裂かれながら日々を生活しているのだ。

今から10年ほど前、ある60代の男性のカウンセリングを受けた。その人は、元々はエリートサラリーマンだったのが、うつ病になって、年をとってからカウンセリングの勉強を始めたという人だった。「ジェンダーにセンサティブになってしまったってことは、大変なご苦労でいらしたと思う」と言ってくれた。その人はお母さんが病弱だったため、「病気」に対して過度にセンサティブになってしまって苦労したことがあったらしいのだけど、ジェンダーのほうの問題が大きいのだ。ジェン

ダーは生活の細部にまで入り込んでしまっていて、いったん囚われると生活全体が不愉快になる。また鈍感な人はまったく理解できないため、誰からも理解してもらえないという状況になってしまうのである。

## 6. 『電車男』

『電車男』(村上正典監督・2005)は、たわいのない映画なので、罪はない。暇つぶしに見る分には悪くないだろう。オタクの男の子の話なのだが、オタクの生態を描くのではなく、彼が女性と付き合うまでが話の中心となっているのだが、結局、このラブストーリーが実は彼の幻想のなかの物語だったという落ちがついて終わる。すなわち、オタクの男の子って、こんな幻想をしているものなんだという話なのである。

これを男性学的に分析してみよう。

### ①女を救う

主人公(山田孝之)は、22歳で、年齢と彼女いない歴が一緒という人物だが、電車の中で男に絡まれている女性(中谷美紀)を救ったことがきっかけで、生まれて初めて女性と付き合うことができるようになる。彼女はお金持ちのお嬢さんで、聖女のように優しい女性なのである。

悪漢に絡まれた男を救うことで女にもてる男になるなんて、本当に古臭い男性観で、あきれてしまう。これはコメディだからまだ許せるが、真面目に描いていたら、こんな不愉快な話はまずないだろう。男だって、絡まれたら怖い。自分の彼女や妻や母親や娘であっても、体をはって守る男なんて、今時ダサイ。

まして、この映画、電車のなかでの見知らぬ女性という設定である。他にも多くの乗客が乗っているし、見知らぬ女性を守るために一人だけ立ち向かう男なんて、古めかしいヒーロー願望である。

しかし、そう思うのは、俺がジェンダーに反発する男だからで、現実にはこういう幻想を抱いている若い男は未だにいるのだろうか。

### ②深窓の令嬢におごる。

彼が救ったことがきっかけで、親しくなる女性は、昔風の言い方言えば深窓の佳人である。何一つ苦勞せず、桁違いの金持ちに育てられたお嬢さん。したがって、お金はたくさんもっている。しかし、彼は、彼女とのデートでどうしてもおごりたいという願望をもっている???

これはどういうことなのか。相手のほうがはるかに金持ちなんだし、彼女のほうも割り勘にしましょうと言っている。なのに彼は「男がおごらなくては!」というプレッシャーを感じているのだ。

これまた俺に言わせれば、おかしなヒーロー願望である。僕だったら、男女を問わず、自分よりもお金持ちだということが明らかなら、躊躇なくおごってもらおうが、自分よりも貧乏だということが分かっている人におごってもらっても嬉しくない。親しさの度合いにもよるが、無理されると、むしろ負担になる。

もう15年近く前になるのだが、ある男性が軽食をおごってくれた。僕より年上の人だし、収入も僕に比べれば多い。ただ大して親しいわけではないので、おごられて恐縮してしまった。優しい人だから奢ってくれたんだと僕

は解釈して、好意的にとらえていたのだが、そのことを他の人に話すと、「あの人は、男はおごんなきゃという意識をもっているんですよ」とのこと。なるほどねー。男って、そんなふうを考えるの？ 俺は潮流とは外れた男なのか??? と一瞬、目が点になった。

しかし、この映画を見ていると、そういう男は今でもいるんだろうなあー。

### ③もてない男のサイト

この映画ではもてない男のサイトが出てくる。主人公のオタク青年は、ネットで見知らぬ友達と付き合うしか、人付き合いもないのだ。

で、この部分は、それなりに面白い。他のオタク友達が彼の彼女作りを応援するのだが、こういう話を打ち明けられるグループは、男にとって心強い。今ほどのネット時代になる以前・15年ほど前に、もてない男同士で場を共有して語りあうグループは、東京のほうにいくつか存在していた。所謂、男性運動だったわけだが、今はそういうグループも消滅してしまったようだ。しかし、サイトに場を変えて、こういう語らいが行われているのだとしたら、好ましい側面もあるだろう。とはいうものの、現実にはこの映画のように微笑ましくはいかず、ブログ上で喧嘩になって、あわやブログ炎上というところが頭に浮かぶのだけでも。

しかし、男が「俺はもてないんだ」と自信を持ってカムアウトするようになったことは、男性学的に見て、価値ある進歩である。

### ④小ざれいにしてデート。

彼女とのデートすることになった主人公は、

まず身だしなみをととのえ、おしゃれをする。昔は、むさい男でも許されていたが、今では女性と会うのに、小ざれいにするのはエチケットである。男のエステもだんだんと一般化していくのだろう。

2人のデートの場面では、彼が彼女の前で泣いたりする場面も出てくる。男が好きな女の前で泣けるようになったことも、男性学的に見れば好ましい。男性が心のバランスを崩しやすいのは、「男の子だから、泣いちゃダメでしょ。愚痴っちゃダメでしょ。」というプレッシャーが大きく原因していることは、もう耳が腐るほどに言われていることなのだが、一考に男らしさから抜けられない男は、まだまだ存在するのである。

こう考えてくれば、もてない男のサイト、男のエステ、泣くことを恥じない男……と男性学的に見て、進歩と言えるような事柄が描かれている映画に思えるのだが……。重大な×印がいくつかある。

#### ×1) 山田孝之

まず主人公を演じるのが山田孝之である。いかにも髪型や服装をオタクっぽくして登場する彼だが、元々が女性受けするイケ面である。これをイケ面でない俳優さんにやらせていたら、もっとリアルな話になっていたかもしれない。しかし、山田孝之が演じているから、これは最初からお遊び。女性とデートする時に見る、ラブ・コメディなのである。

オタクというとイケ面でないイメージをもっている人が多いだろうから、そんなことはないんだということを世間に訴えてくれる面ではいいのかもしれないが、これはオタクを知るための映画ではなく、山田孝之君のイケ

面ぶりを「可愛い、可愛い」と思いながら、見る映画だ。泣くことも、イケ面だからこそ許されるのだ。

## ×2) 恋愛至上主義

主人公が、「男が女におごる、男が女を救う」という古い価値観に囚われているということも男性学的に見れば問題だが、それよりも大きな問題点は、オタクの男が女性と結ばれることで、幸せになるという筋立てである。すなわち、恋愛至上主義の映画なのである。

この部分を突き崩さなくては、真の男性解放にはつながらないと僕は考える。

『結婚できない男』という阿部寛主演のドラマがあった。主人公は独身で三高なのだが、結婚すると、妻と子供と住宅ローンの三大負債を負わされると考えていて、普段付き合っている特定の彼女もいないという設定になっている。彼は自分流の生活スタイルにこだわっているので、女性がいると自分のこだわりを壊されると考えているのだ。阿部寛ほどのイケ面だから、彼女ができないわけではない、自分からつくらないのである。これこそが俺が描いて欲しかった男性像！ 思わず、ほくそ笑んでしまった。

とはいうものの、俺はこのドラマのDVDを途中までしか見ていない。おそらく、女嫌いの彼が、心を変えて、女性と結ばれて、ハッピーエンドになるのではないかなあと思ったので、怖くて先を見ることができないのである（笑）。

前にある女性から、「ソクラテスの悪妻という言葉もあるし、悪い女とでも結婚すれば成長もあるわよ。」と言われたことがあるのだが、本当にそうなの？ もちろん、結婚したい人

はすればいいんだけど、結婚も恋愛もしない男だっていたっていい……そういう世の中になってくれないかなあー（笑）。

女性にとらわれずに生きるにはゲイしかないのか！？・・・あー、男は痛いです。